鈴鹿市の戦争遺跡を保存・平和利用する市民の会会報

２０１０年３月９日　第４号

旧陸軍施設跡を見学　４０人が参加
～説明を聞いて分かる痕跡～

第２回戦争遺跡見学会(陸軍編)は１１月２８日、会員ら約４０人が参加して行われました。鈴鹿市立神戸中学校の社会科教員・浅尾悟さんの案内と解説で、鈴鹿市の鈴鹿川の北側に広がっていた旧陸軍関係施設の陸軍第一気象連隊、陸軍第一航空軍教育隊、北伊勢陸軍飛行場掩体、北伊勢陸軍飛行場を見て回りました。国の登録有形文化財の掩体のほかは、土台などが残るだけで、浅尾さんの説明を聞かなければ見過ごしてしまいそうなところがほとんど。いまは民有地となっている広大な土地に、兵舎や格納庫、飛行場があったのだ、と想像力をふくらませました。

《陸軍第一気象連隊》(鈴鹿市石薬師町)

１９４２年５月に設立された気象教育としては国内唯一の部隊。各地から集められた幹部候補生がここで半年間学び、中国大陸や南方戦線の各部隊に１～２人、指導者として配属された。その数は３万人にのぼるそうです。

連隊の存在を知ることができるのは、県立石薬師高校の正門手前のロータリーにある戦友会がつくった「第一気象連隊記念碑」。当時、ここに西門がありました。その前で、浅尾さんは「いま新聞に天気予報が載るが、戦時中は軍の機密扱い。あすの天気は勝ち負けにつながる貴重な情報だった」と説明。２０年ほど前までは建物がちょこちょこ残っていたが、いまは道路だけが当時のものを使用しています。連隊本部はいまの県消防学校内にあり、以前、発掘調査し、陸軍のマーク入りの皿などが見つかったということです。

《陸軍第一航空軍教育隊》(鈴鹿市高塚町)

現在ニュータウンや畑が点在する一帯に、教室、兵舎、格納庫などがありました。兵舎跡は住宅地になってほとんど遺跡はない。教室と格納庫は基礎の一部が残っています。「６つの教室があり、ここで下級幹部候補生を対象に航空に関する基礎教育をした」と浅尾さん。その東側に同規模の３つの格納庫があり、戦後も数機の戦闘機が格納庫内に残っていたという。建物を囲う基礎の一部のほか、汲み取り式トイレが残る。水路も当時のままということです。

教育隊の中で唯一、原型を残した建物が残した建物がありました。弾薬庫跡だ。鉄筋コンクリートの厚い壁。４つあったが、たまたま倉庫に使われてこれだけ残ったとか。爆発したとき上に抜けるよう屋根は軽くつくられており、トタン屋根でした。

説明を行う浅尾さん(陸軍第一気象連隊跡)

陸軍第一航空軍教育隊弾薬庫

《北伊勢陸軍飛行場掩体》（鈴鹿市三畑町）

民家の庭先に、奇妙な形状をした巨大な小山があり、中はだだっ広い空洞になっています。横幅２９・６メートル、奥行き２３・１メートル、高さ３・８メートルの不正六角形。戦争末期、本土決戦に備え、保有戦闘機を温存・避難する目的で飛行場周辺に造られた航空機避難施設「掩体壕」の一つです。

掩体壕は神社などの森の中だったり、周囲を盛り土した土製がほとんどでしたが、ここ三畑町に残る掩体はコンクリート製。「この種の掩体は三重県では唯一のもので、全国的にも大変珍しい」と浅尾さん。国の登録文化財になっています。

北伊勢飛行場の北方に位置しており、飛行場とは誘導路で結ばれていました。終戦直後の入植者の証言によると、中は土が詰まった状態だったといい、建設はされたが、一度も使用されなかったようです。戦闘機が数機は入るという空間に農機具などが置かれていました。やはり説明を聞かなければ分からない奇怪な構造物に、参加者たちは驚きの表情でした。

北伊勢陸軍飛行場掩体

掩体内部

《北伊勢陸軍飛行場》（鈴鹿市広瀬町、亀山市能褒野町）

鈴鹿郡川崎村から広瀬村にかけての広大な敷地が選定され、１９３８年ころから用地買収。１９４１年に岐阜県各務原飛行学校の分教所として開設されました。１９４３年には明野陸軍飛行学校の分教所に移管されましたが、ほかに先に見学した陸軍第一空軍教育隊など多くの陸軍部隊が使用しており、「北伊勢陸軍飛行場」は通称ということです。

現在の古河電工内に滑走路があり、施設の南西部に部隊兵舎と１０の格納庫がありましたが、いま飛行場を感じさせるものは全くといっていいほどありません。工場敷地の境界線に、鉄筋コンクリートの塊が列をなしています。これが格納庫の基礎部分。頑丈すぎて撤去をあきらめその結果たまたま残ったようです。

最後に訪れたのは、広瀬町の江藤久生さん方の倉庫。終戦直後拾った機体の破片などを見せてもらいました。（竹内）

北伊勢陸軍飛行場格納庫跡

江藤さん方で機体の一部をみる参加者

「市制 67 周年記念　鈴鹿市のあゆみ」展を開催して

昭和 17 年 12 月１日に神戸・白子の２町と１２ヶ村が合併し、軍都として鈴鹿市は立市しました。そうした歴史的背景をもとに１２月１日が市制記念日とされました。

この市制記念日に合わせ、昨年の１２月２日～２０日まで市立図書館において「市制 67 周年記念　鈴鹿市のあゆみ」展(後援：鈴鹿市・鈴鹿市教育委員会)を開催しました。

会場には、今も市内に残る軍関連施設(戦争遺跡)の写真パネルを始め、軍施設の古写真や施設に関連した資料等約 60 点が展示されました。関連資料は浅尾悟氏(神戸中教諭・会員)の所蔵品で、なかでも鈴鹿海軍工廠の工員募集の大型ポスター(縦 148cm、横 54cm)は、当時の緊迫した戦局を窺がうもので多くの人の目を奪いました。また、海軍航空隊関連では訓練講義資料の他、「橿原・吉野を訪ねて」・「奈良に遊ぶ」といった隊員の旅行しおりは、厳しい訓練の合間の楽しいひと時を垣間見る資料として感慨深いものでした。そして、短い会期にも関わらず約 500 人余の方が足を運んでくれました。

その中に、敗戦数ヶ月前、旧制神戸中学校 3 年の時に航空基地近くの三菱重工で働いたという山口俊彦さんの姿がありました。当時を思い起そうと長時間にわたって資料を眺めておられました。また、「かつて勤務した第二鈴鹿海軍基地の跡地を今日の資料によって確認できて、何か、安心致しました。ありがとうございました」と、感想を記していった東磯山在住の方もおられました。

ささやかな展示会でしたが、人それぞれの思いや人生が込められているように思われました。皆さんの目にはどのように映ったでしょうか。

また、「鈴鹿市の生い立ちを初めて知った」・「自分の住んでいる近くにこうした戦争遺跡が残っていることを初めて知った」という見学者の声もたくさん聞かれました。

鈴鹿市の生い立ち(歴史)を語る写真パネルや資料をとおして、平和の尊さを学ぶとともに、戦後、軍需工場跡地に平和産業を誘致し、今日の鈴鹿市の礎を構築された関係者や住民の労苦と感謝の心をいつまでも記憶のなかに留めていきたいものです。「これからもこのような貴重な資料を見せていただき、次の世代の人たちにも戦争のことや平和の大切さを感じてほしいと思いました。 今後もこのような機 会を毎年継続していいただくことを希望します」と、感想を残された女性もおられました。改めて、「鈴鹿市のあゆみ」展を継続していく意義を強く感じた次第です。

(中森)

鈴鹿海軍工廠工員募集ポスター　　鈴鹿海軍航空隊関連展示品

資料紹介

吉本嘉・戦時下日記

吉本　嘉氏

ここに紹介する戦時下日記の筆者・吉本嘉(本名；嘉平、１９１７～５７年)は抽象画家・浅野弥衛の実弟である。吉本は母方の姓でその跡を継いだ。三重県立神戸中学校(現；神戸高校)から慶応に学んだ。慶応卒業後しばらく東京で会社勤めをしたが、体調を崩し、昭和１０(１９３５)年代末頃、郷里の鈴鹿に戻り市役所に勤務した。

戦後の復興期に義兄・清水信氏や浅野たちと「エトワールの会」や「ブルーフラッグ」といった少年少女への文化情操教育の会を開いた。生前に清水氏との共著の小説集『昨日の風』『人生の余白』があり遺作集『ばるこん』が共に北斗工房から出版されている。昭和３２年１０月２３日、勤務中に倒れ独身のまま亡くなった。享年４０であった。

ここに紹介する一文は〈昭和二十年四月二十八日記〉とあり、鈴鹿市内にあまり残っていないであろう戦時下の記録かと思い、全文を以下に揚げておきたい。

「戦争は日いち日と危機の深淵に近付いてゐる。私達は何を信じて生きて行くのか。昨日よりも今日の不安は大きい。

昨年十二月七日には知多渥美半島一帯を震源地とする地震が尾張静岡伊勢を襲った。天災に見舞はれることの少なかった土地の人々受けた衝撃は大きく、この町でも家屋の倒壊数戸にのぼり、北新町の丸桑といふ以前繭の仲買人をしていゐた家では折柄家の中にある防空壕に飛び込んだ妻子三名がそのまま倒壊してきた家の下敷となって即死した。

丁度地震は午後二時過ぎであった。どんな家でも戸障子壁に相当の被害を受けたのは勿論である。それでも割合にこの地震に対する人の話が冷静にすぎていったのは戦争の現実の比較にならぬ不安と苛烈さによるものであらうと思う。実際には三重県南部の一部落などは津波による全村壊滅などありつゞひて昭和二十年一月十三日には未明に余震とふには相当以上に大きい地震が再度同じ地方を襲ったのである。

アッツ島の勇士が玉砕したのが昭和十八年五月であり、同じ十八年二月には既にガナルカナル島撤退と五月に山本五十六元帥の戦死、十八年末にはマキン・タワラ島玉砕及クエゼリン、ルオット島全員戦死、十九年にはビルマ戦線拉孟騰越に於ける陸軍部隊全員戦死についで三月には古賀峯一元帥殉死。ペリリューン島モロタイ島の孤立、大宮島テニヤン島の全員戦死につづいて七月には十八日遂にサイパン島失陥が報じられて東條内閣の総辞職となり、小磯国昭陸軍大将の内閣が登場したが、この頃より敵機Ｂ２９による本土空襲漸く激しくなり十一月より超えて二十年三月に至る迄に、東京、大阪、名古屋、神戸及び北九州は何回となきＢ２９百機内外の来襲を受けたのである。そして、山河札硫黄島又しても敵の手に渡り小磯内閣の退陣となり鈴木貫太郎海軍大将(７９才)を首相とする内閣の出現となったのであるが、これと時を同じくして四月一日慶良間列島及沖縄本島に敵の上陸を見、四月末迄に六ヶ師団を揚陸し、北・及中飛行場も使用し始めたといふ戦況であった。

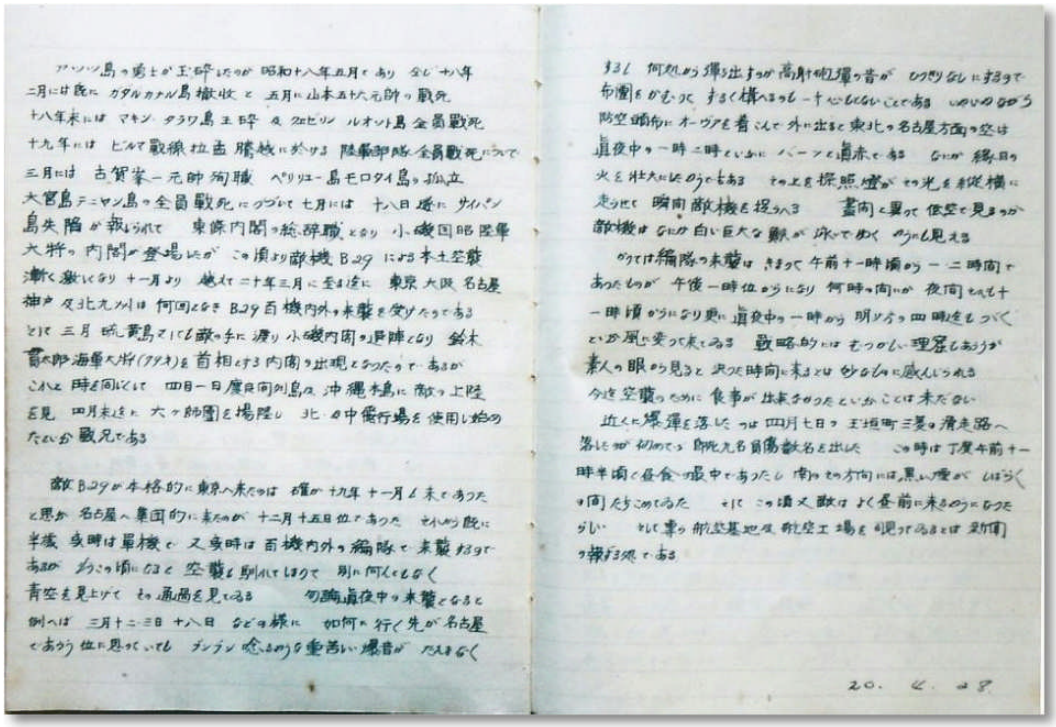
敵Ｂ２９が本格的に東京に来たのは確か十九年十一月も末であったと思ふ。名古屋へ集団的に来たのが十二月二十五日位であった。それから既に半歳或時は単機で、又或時は百機内外の編隊で来襲するのであるが、もうこの頃になると空襲も馴れてしまって別に何ともなく青空を見上げてその通過をみてゐる。勿論真夜中の来襲となると、例えば三月十二・三日、十八日な

どの様に如何に行く先が名古屋であらう位に思っていてもブンブン唸るやうな重苦しい爆音がたえまなくするし、何処から弾ち出すのか高射砲弾の音がひっきりなしにするので布団をかむってずるく構へるのも一寸心もとないことである。いやいや防空頭巾にオーヴァを着こんで外に出ると東北の名古屋方面の空は真夜中の一時二時といふにバーッと真赤でなにか縁日の火を壮大にしたやうでもある。その上を探照灯がその光を縦横に走らせて瞬間敵機を捉らへる。昼間と異なって低空で見るのか敵機はなにか白い巨大な鯨が泳いでゆくやうに見える。

かくて編隊の来襲はきまって午前十一時頃から一、二時間であったものが午後一時頃からになり、更に真夜中の一時から明け方の四時迄もつゞくといふ風に変って来てゐる。戦略的にはむつかしい理窟もあろうが素人の眼から見ると決った時間に来るとは妙なものに感じられる。今迄空襲のために食事が出来なかったといふことは未だない。

近くに爆弾を落したのは四月七日の玉垣三菱の滑走路へ落したのがせ初めてゞ、即死九名負傷数名を出した。この時は丁度午前十一時半頃で昼食の最中であったし、南のその方向には黒ひ煙がしばらくの間たちこめてゐた。そしてこの頃又敵機はよく昼前に来るやうになったらしい。そして専ら航空基地及航空工場を覗ってゐるとは新聞の報ずる処である。」

以上の吉本の日記はエッセイ風ではあるがそれだけに戦争末期の当時の市内の様子や日本の情勢がいち市民の日常の感情等がよく表現されている。鈴鹿市への米軍による威嚇攻撃はこの記述以降多くなる。また、冒頭の地震は後に東南海地震、一月の余震を三河地震と呼ばれた巨大地震であった。しかし、周知のように戦時下のためその被害状況や直後に襲った大津波災害の状況などはほとんど極秘にされ大部分報道されなかった。そうしたなか、吉本が日記に書くように〈戦争の現実の比較にならぬ不安と苛烈さ〉の日々のなかで当時の人々は生きていたのである。



吉本嘉・戦時下日記

第２回「鈴鹿市の戦争遺跡を保存・平和利用する市民の会」総会及び記念講演会のご案内

・日　時　　２０１０年４月４日（日）　受付：午後１時～１時３０分
総会：１時３０分～２時１５分
記念講演：２時３０分～３時３０分

・場　所　　鈴鹿市労働福祉会館（鈴鹿市神戸地子町３８８、中央道路そい、消防署西）

・講演会　　「戦争と文学」清水信さん（文芸評論家、鈴鹿市在住）

～清水信さんのプロフィール～

大正９(1920)年長野市生まれ、３歳の時、父の転勤(旧制県立神戸中学校物理教師)で母の郷里・鈴鹿に移る。神戸中学校卒業後上京、明治大学文芸科で小林秀雄、山本有三、横光利一、萩原朔太郎らの薫陶を受け、卒業後外務省事務官として北京日本大使館に勤務、この間、中園英助らと「燕京文学」を創刊。また東亜新報に萩原朔太郎追悼記事などを書き、最初の評論集『日曜手帳』(北京書房刊)を刊行。この頃、恩師小林秀雄と北京で再会。その後、昭和19(1944)年河南作戦に従軍し戦争の実態をレポート。翌年敗戦の報を蒙古大同で聴く。戦後、市内の中学校教師、教職員組合委員長などを務めながら執筆活動に専念し、昭和37(1961)年に第３回近代文学賞を受賞。全国唯一の「同人雑誌センター」を自宅に開設。朝日、中日など多くの新聞文芸欄を担当。中日での文芸欄は現在まで３０年以上続いており、平成19(2007)年第６０回中日文化賞を受賞。今年は満９０歳を迎え、「清水信先生Ｑ寿の会」を各地で開催、当講演会もその記念の会の一環。著書に「作家と女性の間」(現文社刊)、「魅力ある作家たち」(沖積舎刊)、「清水信文学選」全１０１巻(いとう書店刊)など多数。

会報４号編集後記

「鈴鹿市の戦争遺跡を保存・平和利用する市民の会」は３月で発足１年となりました。海軍編、陸軍編それぞれ１回ずつ見学会をしたほか、白子公民館、鈴鹿ハンター、市立図書館で、戦争遺跡展を催し、さらに FM 鈴鹿にも出演して会のねらいを視聴者に訴えました。こんな活動を通して、ぼつぼつながら市民権を得てきたように思います。これからもぼつぼつ、こつこついきます。４月４日の総会には清水信さんが「戦争と文学」と題して話してくれます。多くの方々の参加をお待ちしています。(竹内)

鈴鹿市の戦争遺跡を保存・平和利用する市民の会
代　表　　加藤二三子、竹内宏行
〒510-0254　鈴鹿市寺家１－２－４７
電　話　　０５９－３８８－６５０８
メール　　ta818hi@mecha.ne.jp
ＨＰ　http://www006.upp.so-net.ne.jp/asao/peacesuzuka.htm